

長岡市長記者会見要旨

日 時：平成31年4月24日（水）午前10時から

会 場：アオーレ長岡東棟4階 大会議室

【会見項目1：公開トキ5羽の愛称が決定 考案者を1日館長に任命しセレモニーを開催】

（長岡市長）

トキと自然の学習館「トキみ〜て」で公開している、トキ5羽の愛称が決定しました。

附属長岡小学校6年生、現在中学校1年生の森山イルハさんが考案した、しなの、のずみ、けやき、ひかり、ほたる、です。それぞれ地域の思い、市民の思いが詰まった愛称を名付けていただいたということで、多くの市民の皆さま、来館者の皆さまに親しみを持ってもらいたいと思います。

この愛称は、市内の小学校の子どもたちから募集したところ、52校、1,078点の応募があり、審査によって選んだ5点の最終候補について、3月1日から1カ月間、市民の皆さまから投票いただいたところ、投票総数が1,617票、その中で森山イルハさんの考案した名前への投票が一番多かったということです。

それぞれ愛称がわかるように、5羽には色の異なる足環を新たに装着して、表示板で説明します。

なお、4月27日の午前10時から、愛称決定のセレモニーを「トキみ〜て」で行います。考案者の森山さんには賞状と記念品などを贈呈するとともに、1日館長に就任していただきます。

なお、4月22日から25日まで臨時休館し、「トキみ〜て」のケージを囲う金網の撤去作業を行っています。今まで金網が二重になっていまして、見えにくいというお話がありましたが、金網を撤去することによって、より観察しやすく、見やすくなりますので、ご期待いただきたいと思います。26日から公開を再開します。

「トキみ〜て」は昨年8月18日にオープンしましたが、4月21日までに4万686人のお客さまがお越しになっています。

このたび、さらなる交流人口の拡大を図るため、長岡観光コンベンション協会主催の「越後長岡歴史館・博物館めぐり スタンプラリー」に参加しました。11月30日までのラリー期間中に冊子を提示いただきますと、「トキみ〜て」のオリジナルグッズをプレゼントします。また、ゴールデンウィーク期間中は休まず開館しますので、多くの方々からお越しいただきたいと思います。

（記者）

先ほど市長は交流人口の拡大につなげたいとおっしゃいましたが、名称決定を受けて、観光資源としての「トキみ〜て」に寄せる想いをお聞かせください。

（長岡市長）

オープンしてから、想定していたよりも多くの方々から訪れていただいています。愛称決定は、より身近にトキを感じていただけるということで、大きな力を持つのではないかと考えていまして、近い将来の自然放鳥に向けて期待も膨らんでいる中で、よりトキに対する親しみを持っていただきたいと思います。

(記者)

「トキみ〜て」への公共交通機関は未整備だったと思うのですが、現在の状況をお聞かせください。

(環境政策課長)

公共交通機関の整備の予定はありません。現在は、マイカーあるいは観光バスでお越しいただいている状況です。

【会見項目2：下水道イノベーション技術の実証研究を開始

～プラント施設の小型化で低コスト・省エネ型システムを全国へ～】

(長岡市長)

昨年4月、長岡市と株式会社大原鉄工所、長岡技術科学大学ほか3社で構成する共同研究体は、国土交通省の実証実験「下水道革新的技術実証事業」、通称「B-DASHプロジェクト」の採択を受けました。

このたび中之島浄化センターに整備を進めてきた実証施設が完成し、実証研究を本格的に進めていきます。

下水汚泥のエネルギー化は、長岡中央浄化センターをはじめとして、全国でも大きな処理場がスケールメリットを生かしながら取り組んできましたが、国全体でもエネルギー化された割合は22%にとどまっていると聞いています。

より一層の取り組みが必要とされる中で、今回、長岡市をはじめとした共同研究体に取り組む技術は、採算性やコスト面から導入が進まなかった規模の小さな処理場で下水道汚泥のエネルギー化に取り組むもので、高濃度のメタン発酵技術を用いて効率的にエネルギー化して、処理場内でそのエネルギーを使う、エネルギーの地産地消を目指すものです。

施設は、下水汚泥を「高濃度に濃縮する脱水機」、エネルギー化や減量化に必要な「消化槽」、消化ガスをためる「ガスホルダ」、そして、発電装置である「バイオガス発電機」などで構成されています。

新しい技術は、汚泥を高濃度に濃縮することによって、消化槽の容量を従来に比べ約40%の大きさに設置可能にします。また、各設備をユニット化することで施設全体をコンパクトに配置することが可能になり、従来技術と比較して建設費は約45%、金額にすると約3億1,000万の削減が可能になりました。また、敷地の面積も30%削減することが可能です。

今後は、データの採取・分析を行いながら、実証施設、実証機の安定性や維持管理性、さらに建設費と維持管理費を合わせた総コストの比較を検証しまして、その後、国のガイドライン策定まで結び

つけ、本技術の普及・発展につなげていきたいと考えています。

なお、報道関係者の皆さまには、5月10日の午後1時30分から、中之島浄化センターで現地見学会を開催しますので、ぜひご覧いただけたらと思います。

最後になりますが、全国で2,200カ所ある下水処理場のうち、小規模下水処理場はそのうち4分の3の1,500カ所以上を占めています。

この技術の活用が国全体で大きく期待されている中、この長岡の地で実証されるということで、長岡版の下水道のイノベーションの実現に向けて、引き続き市内の産・学・官が連携して新技術の開発に取り組んでいきたいと考えています。

(記者)

今後のスケジュールですが、具体的に実用化にはどのぐらいの期間がかかると見込んでいらっしゃいますか。

(下水道課長)

今年度は実証研究に向けて施設が完成しましたので、データの採取・分析を行います。

具体的には、約1年間、春・夏・秋・冬の汚泥の変化に伴う運転操作技術などを検証しまして、今年度中に国によるガイドラインを策定したいと考えています。

32年度以降は、さらに1年間実証し、データの蓄積をもっともっと積み上げていって、ガイドラインをフォローアップできるように自主的な研究を進めていきます。

国がガイドラインを作成しますと、今後実用化に向けた大きな動きが発生するのではないかと考えています。

(記者)

新技術を開発することによって、長岡市や共同研究体に参加する企業さんに、例えば特許などのメリットがあるのでしょうか。

(下水道課長)

今後、そういった特許が取れるかどうか、国と一緒に研究していきたいと考えています。

(記者)

将来的に、この技術によって収入が生じるようにしていきたいと考えているのか、それともただ国の技術に資したいと思っているのか、いかがでしょうか。

(下水道課長)

国の技術に資することはもちろんなのですが、この技術導入によって汚泥の削減が図れますし、それから今まで購入している電力に対して、バイオガスを発電することで電力還元できるなどが考えられますが、そういった金額的な部分は改めて検証したいと思います。

(長岡市長)

この技術の開発による特許などは、おそらく参加している業者さんに帰するということになります。

この実証実験は、長岡市に直接的なメリットがあるわけではありませんが、長岡市はこのプラントを今後ずっと使い続けますので、そういう意味では市の下水道事業に十分メリットが出るのは間違いないです。

それと、平成11年から長岡中央浄化センターで取り組んだ消化ガスの活用によって、長岡市は全国的に下水道事業の先進都市と評価されています。

今回のこの研究によって長岡市の取り組みがまた評価されて、市の政策全体に対する評価、長岡はイノベーションの地である、という評価の面では資する部分はあると思います。

(記者)

今回は、装置が革新的な部分なのでしょうか。それとも、装置はもともとあるけど、組み合わせが革新的なのでしょうか。

(下水道課長)

今回実証実験を行う、すべての取り組みで革新的なことがあります。

「高濃度濃縮技術」では本来は「脱水機」のほかに「濃縮機」が別に必要になるのですが、今回は既存の「脱水機」を「濃縮機」としても活用します。

「バイオガス発電」では、これはもともと大原鉄工所さんの「バイオガス発電」がありましたが、今回は小規模な下水道の処理場に対するバイオガス発電ということで、このガス発電機を小さな量に対しても追従できるようにします。

それから「ガスホルダ」も、大きな処理場ではコンクリート製の「ガスホルダ」なのですが、今回は「バッグ製」の小さな「ガスホルダ」を利用し、「高濃度消化技術」では、横型の「パドル技術」でしっかりと消化槽の中をかき混ぜることができるか、検証します。

(記者)

最終的には発生した電力を売電するというお話があったと思うのですが、そうなってくると既存の電力グリッドを使用することになると思います。その場合、電圧や電力量の関係で、グリッドに接続するにあたってスマートグリッドを導入する必要があるかと思うのですが、その点に関していかがでしょうか。

(下水道課長)

売電ではなくて、処理場内の電力として、自立エネルギーとして使うものです。

(記者)

そうすると、処理場内で電力を消費して、余った部分は売電することがあるのでしょうか。もしくは、足りない場合は電力を購入するということになるのでしょうか。

(下水道課長)

今のところ、小規模処理場の段階ではやはり自立エネルギーだと思います。大きな処理場では、自立エネルギーから余る部分があるので売電、というふうになるのですが、今研究しているのは小規模

下水処理場ですので、売電することは少し難しいのではないかと考えています。

【その他の質疑応答】

(記者)

平成が間もなく終わります、令和という新しい時代が始まりますが、改めて令和を迎えるということについてのお気持ちをお聞かせください。

(長岡市長)

長岡市としてこれから「新しい米百俵」を始めるこのタイミングで「令和」という新しい元号が始まるのは、明るい時代、明るい長岡の将来をつくっていくという決意を新たにするという意味で、私は心から歓迎したいと思っています。

「新しい米百俵」にしっかりと取り組み、市民の皆さんと一緒に新しい長岡市を作っていきたいという思いを強くしているところです。

(記者)

県議選、それから長岡市議選の結果を受けて、市長の見解をお聞かせください。

(長岡市長)

率直なところ、やはり新しい波、新しい流れ、新しい市民の思いがはっきり出てきたなと感じております。私としても、そういった新しい動きにしっかりと耳を傾けて、新しい長岡の将来像に向けてもっとスピード感を持って市政を進めていきたいと思いました。

(記者)

県議選では今回の官製談合事件で秘書が逮捕された星野さんが、6人中5位という結果に終わり、また市議選でも星野さんを支持する議員の方が票を減らしましたが、やはり事件の影響があったとお考えでしょうか。

(長岡市長)

もちろん事件の影響はあったんだと思いますが、ただそれが全てではないでしょうし、私が先ほど申し上げた新しい動き、新しい波が、この結果に大きく表れているだろうと思っています。

(記者)

年度初めに市長も職員の訓辞で「忖度する必要は一切ない」とおっしゃっていましたが、職員全体の意識はどのように感じていらっしゃいますか。

(長岡市長)

もちろん、職員はよくわかっていると思っています。その中で、事務事業の実施、政策を行うに当たって、市民の皆さんの心をよく知る、声を聞く、寄り添った仕事をするということをさらに徹底する必要があると思います。

(記者)

さきほど市長は、「新しい波、新しい流れ、新しい市民の思いがはっきり出てきた」とおっしゃいましたが、具体的にどの部分でそのような印象を受けたのでしょうか。

(長岡市長)

やはり票を伸ばした人、あるいは減らした人があるわけですが、それは間違いなく有権者である市民、県民の思いです。選挙の結果は、そういった市民の思いが反映されているという大前提の中で、私はそこに市民の方の新しい希望とか、あるいは思いが込められていると感じたということであって、個別にこの部分がこうだということではありません。

(記者)

市長は以前、市政と政治の関係性について、長年続いてきた空気というような言い方をされていたと思うのですが、今回の県議選の結果を受けて、変わるのでしょうか。

(長岡市長)

当然、その部分は変えるということです。

それが端的に4月1日に職員に言った、政治に対して付度は不要であるということです。

そうした不正を生むような空気は一掃したいと思っています。

(記者)

新潟アルビレックスBBの中地区優勝についてなのですが、3シーズン目にして初タイトルを獲得しました。目標としていたチャンピオンシップ進出も決めたということですが、受け止めをお聞かせください。

(長岡市長)

この日がこんなに早く来るとは思わなかったというのが正直なところです。

今シーズンの快進撃は本当に驚きであり、本当に大きな喜びだと思っています。それがまた、新しい米百俵スタートの今年に重なったということは、長岡市民、長岡市にとっては本当に大きな勇気と、力を与えてくれると思っています。

ぜひチャンピオンシップも勝ち抜いて、優勝してもらいたいと思っています。

(記者)

「バスケットボールのまち」を打ち出す長岡市として、チャンピオンシップ進出に関連して何か新しい取り組みをされるのでしょうか。

(長岡市長)

ブースターの皆さんがいかに盛り上げてくれるか、あるいはスポンサーがどのくらい裾野を広げてチームを支えるかというのが将来的には大きな力になります。

そうしたブースター、そしてスポンサーの輪が広がるようなことについては、長岡市としてもいろいろなことを考えながら協力していきたいと思っています。

(記者)

談合事件に関連して伺います。今までの空気感を一扫したいとおっしゃいましたが、議員の方から市に対する正式な陳情と、暗黙の圧力といいますか、そういったものをどのように区別していくのでしょうか。

(長岡市長)

少し誤解があると困るのは、市会議員の皆さんです。

「政治家」と言ったとき、市会議員の皆さんも「政治家」なのですが、市会議員は本当に市民の皆さんの声を聞いて、それを私に、あるいは長岡市の行政に届ける重要な役割を持っているわけですので、市会議員とのパイプを細める必要は全然ない。むしろ太くしていく、しっかりと受け止める必要があると思っています。

ただ、県会議員、国会議員の皆さんが、市政あるいは市民の生活に関係のないところでいろいろな接触があるとしたら、私や幹部職員に限定しながら対応するよう、ガイドラインできっちり区別をしていきたいと思っています。

市会議員の皆さんは、市民の声の代弁者という面が本当に強いので、そこはより耳を傾けていくということが必要だと思っています。

(記者)

先日の星野県議の秘書の裁判では、二十二、三回にわたって価格についての情報を聞いていたと。業者から謝礼として3万円ほど受け取ることがあって、いわゆる選挙協力であったという証言がありました。言ってしまうと、選挙のために長岡市が利用されたことになると思うのですが、市長のお考えがありましたらお聞かせください。

(長岡市長)

今回の裁判、あるいは捜査の中で、全てが明らかになったわけではありませんので、あまり想像で言っても仕方がありません。市民の皆さん、有権者の皆さん、そして司法からしっかりと見ていただきたいと思います。

行政としては、仕事の上で、不正や無用な忖度がないように、しっかりと組織運営をやっていきたいと思います。

(記者)

三本被告に有罪判決が出たことに対する受け止めをお願いします。

(長岡市長)

改めて、こういう形で市の職員の不正が出てしまったことについて、心から反省しております。

私も含めて、組織全体でしっかりと再発防止に取り組んでいかなければならないということを改めて強く思いました。

(記者)

裁判の中で25回程度漏えいしていたという検察側からの指摘もありましたが、市長はどのように受

け止めていらっしゃいますか。

(長岡市長)

相当以前からそうしたことがあったという指摘がなされたということについても、自分の不明を恥じるとともに、やはり根がそれなりに深いと言えます。

再発防止については、本当に粘り強く徹底的に取り組んでいかないと、根絶することは難しいんだろうなと思っていますので、職員と一緒に強い意思を持って臨みます。

(記者)

事件の直後には、価格の一致はあり得るという見解をおっしゃっていたと思うのですが、この回数が出てくると結果としてあり得なかったのではないかと。市として、チェックできなかったことに対してどう思いますか。

(長岡市長)

最低制限価格が一致しないものが一致した、というのがあるわけです。その一致が不可能なところに漏れがあったと、私は認識しています。今後、どういった仕組みがいいのかいうことを、今第三者委員会で議論してもらっていますので、それを踏まえて透明性の高い、不正の起きない入札制度を構築していきたいと思っています。

(記者)

今回の市議選の中で、各候補が人口減少や支所地域の振興策など訴えていらっしゃいましたが、新しい議会になって、これとどう向き合って市政を運営していくか、改めてお考えをお聞かせください。

(長岡市長)

選挙結果は市民の意向の反映ですので、市民の皆さんがやはり新しい長岡の動き、波を求めているという部分が今回の中ではっきり出たと思っています。

もちろん、今まであるものが全部だめとか、そういうことではなくて、やはり新しいものを目指すべきだというメッセージは出たと思っています。

そういう意味で、選ばれた議員さんそれぞれから、これからご意見がどんどん出てくると思っていますので、そこはしっかりとお聞きして、議論して受け止めていきたいと思っています。

(記者)

市議選での訴えを通じて、何か新たな現状の市政の低下の課題とか、そういったものを改めて感じた部分はありますか。

(長岡市長)

やはり今のままじゃだめだという、そういうメッセージはあったと思います。

個別の政策は、それぞれ私も意見はあるのですが、全体として、今のままではだめじゃないかと、もっと変えていかなくてはだめじゃないかというメッセージは、特に新人の皆さんにあったように思います。

それは、具体的にその方々が政策的に何を考えているか、聞いてみないとわかりませんが、そのメッセージはやはりあったと思っています。

(記者)

新人の方がこれからどこの会派に所属するかはわかりませんが、最大会派の市民クラブでもお一人落選があったり、共産党が議席が半分になったりと、少し構成に変化が見られるのかなと思います。そのあたりはどう見ていらっしゃいますか。

(長岡市長)

やはり市議員の皆さんは地域をそれぞれ回って市民の声を聞きながら当選して、あるいは票を獲得されてきているわけなので、会派の構成よりも、それぞれの個々の議員の皆さんがどういうふうに市民の声を市政の中に届けようとしているのかということに私は関心を持っていますので、しっかりと議会の中で、また議論の中でそれを聞いていきたいと思っています。

(記者)

官製談合事件について、裁判の中で、前工事検査監が警察からマークされているのを上司から聞いて初めて知ったという表現があったと思います。それに関して、市の内部でそういう事件が起こりつつあるということはわかっていたと思うのですが、市長もご存じだったのでしょうか。

(長岡市長)

昨年末の段階で、ある程度の捜査の協力が求められているということは聞いておりましたが、具体的にいつだったかという話は今はできません。何も知らなかったということではありません。

(記者)

そうしますと、今までの説明とちょっと違うのではないのでしょうか。逮捕されたときは、寝耳に水というか、そのような話だったと思うのですが。

(長岡市長)

もちろん、逮捕が前提だというふうには思ってませんでした。

(記者)

入札は、最低制限価格と一致する業者が複数あった場合、くじ引きになるケースがあると思いますが、長岡市ではくじ引きのケースは多いのでしょうか、少ないのでしょうか。

また、くじ引きの割合を減らしたり、あるいは増やしたりするような対策を市としてとってきたことがあるのか、ある場合にはその理由についてお聞かせください。

(長岡市長)

第三者委員会で全て資料を出していますので、そちらをご覧ください。

(記者)

先ほど市長は、入札制度の透明性を高めていくとおっしゃっていましたが、多少くじ引きになるケースが出たとしても、情報公開は進めていったほうが望ましいという認識でよろしいのでしょうか。

(長岡市長)

そこは両面がありまして、何がいいかという定説はないと思っています。くじ引きが半分以上という自治体もあるかと思っています。そういう意味では、もう徹底的にくじ引きでやったほうが公平だという考え方もあります。しかし、それが果たして本当に入札制度としていいのか、という議論もあります。

積算の根拠も含めて徹底的に全部隠せばいいじゃないか、ということもあるかもしれませんが、ただ全体としては必要な情報は出してほしいと。情報公開の流れの中からはそういった方策もなかなかとれないということで、そのはざままで第三者委員会も今、まさに議論しています。どっちがいいということは簡単には判断できないと思います。